

平成25年5月25日

公益財団法人
船井情報科学振興財団御中

シカゴ大学経済学研究科
潮田佑

2012年度派遣奨学生第二回報告書

シカゴは四月に入っても降雪が見られましたが、近頃ようやく暖かくなってまいりました。今年度が間もなく終了するにあたり、前回の報告書以降のシカゴでの学習と生活の状況を報告させていただきます。

1. コアコース

今年度は、コアコースと呼ばれるミクロ経済学・マクロ経済学・計量経済学の基礎科目群が文字通り生活の全てを占めています。これらの科目の課題に追われつつ、時折思い出すできごとがあります。アメリカの大学院に合格すると、進学を決定する前にキャンパスに招かれることがよくあり、私も昨年四月にシカゴ大学を訪れました。その際開催された説明会において、他校と決めかねている合格者を前に、学部長が「この研究科での一年目は君たちの人生最悪の一年となることを約束しよう」と言い放ったのです。その言葉はまさに真実だったと今にして思います。

シカゴ大学の経済学部はこの一年目のコアコースを非常に重視することで有名で、それは今年のコアコース担当教授12名の中にノーベル賞受賞者や有名教科書の著者が複数人いることから分かります。同時に、毎年多くの成績不振者を退学にしてきたことで悪名高くもあります。過去には、退学者が



他の大学の博士課程を経て一流の学者となった例もあります。近年は優秀な学生が他校に流れるのを防止するためか、退学率もかなり低くなっていますが、それでも非常にプレッシャーのかかる一年であることは間違いありません。七月の二週目から四週目にわたり、これまでの一年間に学習してきた全てが試される進級試験があるので、一年生は全員それを突破することに全精力を傾けています。

実は、私が以前通っていた東京大学経済学研究科の修士課程においてもコアコースがあり、全ての科目で「優」の成績を収めることが博士課程への進学要件となっておりました。以下で、シカゴ大と東大の経済学部のコアコースを比較してみたいと思います。まず、シカゴ大学の方が試験の平均点が高いことは間違いありません。これは、シカゴ大学の経済学大学院では基本的に全員が博士後期課程進学を目指すのに対し、東大の修士課程では大半の学生が修了後にアカデミア以外に就職するからだと思われます。個人的な感覚では、東大の修士課程で偏差値 65 の者が、シカゴ大の偏差値 50 かそれ以下に位置する感覚です。

授業内容が最も異なる科目はミクロ経済学です。東大のミクロ経済学はオーソドックスな内容であり、世界標準の基礎をしっかりと固めることができます。これに対し、シカゴ大学のミクロ経済学はアメリカの他大学と比較しても特異であり、正式な科目名もミクロ経済学ではなく”Price Theory”となっています。ノーベル経済学賞受賞者のゲーリー・ベッカー先生が主導する講座で、数式ではなく英語による直感的



的理解を重視しています。提出課題も、与えられたモデルを解くことではなく、現実問題を分析するモデルを組み立てさせることに重点が置かれます。当然のことながら、英語のネイティブ・スピーカーがこの科目を得意とする傾向にあり、多くの留学生にとっては鬼門の科目となっています。試験問題には、「NBA に労働組合が導入されると試合のチケット代は上がるか」「乳牛用の飼料価格が高騰すると、牛乳の価格はどうなるか」などといった問題が出題され、初めて取り組む学生は目を白黒させることとなります。私自身もこの手の問題に苦しんでおり、量をこなして慣れていくところです。

マクロ経済学や計量経済学の課題では、一年生の中から MATLAB や Stata、R などのソフトウェアを使う課題の比率が高いことが特徴として挙げられると思います。特に計量経済学の後半は、問題のほとんどが授業で学習した理論を使用して実際の統計分析を行わせるものです。多くの学生が中央銀行や大学のリサーチ・アシスタントとして働いた経験が

あるため、東大の修士で主に理論を勉強していた私は不利に感じるものがしばしばあります。したがって、私が留学前の自分にアドバイスをするとしたら、これらのソフトウェアの基本的操作を習得しておくことを強く勧めると思います。

2. 生活状況

シカゴで生活していて強く印象に残るのは冬の長さです。最も寒い季節には最低気温がマイナス20℃近くになりますが、ほとんど屋内にいるうえ、セントラル・ヒーティングで暖められているので、それほど寒さを実感する機会は多くありません。それでも、三月も半ばになると、屋外でのびのびとできず、重厚な石造りの建物に閉じ込められていることに嫌気が差してきます。特に不満を感じるのは地中海沿岸や南米、東南アジアなど暖かい場所から来た留学生のようで、中には週末に帰国する学生も見受けられます。このように皆が首を長くして春を待っているのに、五月に入ってようやく暖かくなると、待っていましたとばかりに多くの学部生がキャンパスの芝生に三々五々寝転ぶこととなります。

シカゴ大学の位置するハイダーパークは、残念ながらめぼしいレストランがそれほど多くないので、それなりの食生活を続けようと思うと必然的に自炊をすることになります。幸い、近所にヨーロッパ風を売りにする大型スーパーマーケットがあり、食材は一通りそろるので、和食も調味料さえそろえておけば色々なものを作ることができます。東大時代には、実家に住んでいた上、定食屋がそこかしこにあったので全く料理をすることがありませんでした。人間は必要性に迫られないことはやらないものだと言われます。



前回の報告書に記したように、普段の生活ではクラスメイト

(特にスタディ・グループのメンバー) と過ごす時間が圧倒的に多いのですが、大学の日本人学生コミュニティにおける交流も盛んです。私は特に、シカゴ大学の公共政策大学院に派遣留学されている官庁の方々にお世話になることが多くあります。気心の知れた日本人の仲間だけで鍋をつついていて、何よりの息抜きになります。

以上ご報告とさせていただきます。末筆ではございますが、このような機会をいただいたことを改めて感謝し、今後とも勉学・研究に励む所存です。季節の変わり目ですが、財団の皆様もお体に気をつけてお過ごしください。